

「ふるさと愛を育み、自己の生き方につなげる社会科学習の実践」 ～生徒たちから学んだキャリア教育のよさを取り入れて～

茅野市立北部中学校 中島博文(3月まで天龍村立天龍中学校)

中学2年生が江戸時代の授業で「村に歌舞伎俳優の市川團十郎が来村した」「旧満島港は天竜川の二大港であり、番所も置かれていた」ことを学習した。Aさんは「天龍村には珍しい歴史なんか無いと思っていた」と語った。同時期、外部講師が全校生徒に「将来も天龍村に住みたい人？」と聞いた。「住みたい」と答えた生徒は残念ながらいなかった。**生徒たちは知識を得たが、授業のわらい「ふるさとの歴史に誇りを持つ」には至らなかった。**どう授業改善をするか、今迄の生徒たちのキャリア教育での取組から**《問題意識の醸成》《未知の状況に対応する》**ことに焦点を当ててきた。

【授業改善のヒントとなったキャリア教育での事例】

【資質能力の3本の柱に照らし合わせると】

事例2(飯田市立鼎中での実践)
【問題意識】「挨拶をするなど周りとのコミュニケーションを大切にする」
【職場体験学習で未知の状況を得た】「挨拶をしようと思っても恥ずかしくてできなくて、声が小さくて気まずかった(未知の状況)。職場の方が『大きな声で挨拶が目標』と言ってくださった。大きな声で挨拶をすると、挨拶を返してくださる人もいた。このことが心に残った。挨拶していない」
【学びを生かす】「自分は目標を決めるとその目標に向かって挑戦できる。また、アドバイスを受け入れられる」

キャリア教育は意欲・態度や能力を育てる教育(キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書 2004年) **体験学習＝キャリア教育ではなく、全教育課程で生徒たちの意欲の喚起醸成を図りたい。**



小単元名:「天龍村の産業革命 その光と影」問題意識の醸成

□第1時:学習問題の設定と追究

平岡村の人口			平岡村の歳入		
年	人口	1888(明治33)年を100とした指数	年	歳入	1888(明治31)年を100とした指数
1900(明治33)年	1929人	100	1898(明治31)年	1689円	100
1905(明治38)年	2168人	112	1911(明治44)年	7994円	473
1910(明治43)年	2378人	123	1915(大正4)年	10647円	630
1915(大正4)年	2597人	135	1920(大正9)年	22612円	1338
1920(大正9)年	2731人	142	1925(大正14)年	38849円	2300
1925(大正14)年	2808人	146	1929(昭和4)年	35944円	2128
1930(昭和5)年	3055人	158	1935(昭和10)年	37763円	2235
1935(昭和10)年	4341人	225			

天龍村史より

【左資料からの問題意識】
 「人口が今と全然違う。人口が2倍以上増えている」
 「歳入が30年も経っていないのに20倍以上増えている」
 「日本の産業革命時、どうしてこんなに潤ったの？」

学習問題「旧平岡村は明治の産業革命時、どうして潤ったか」
 □第2・3時 郷土史家による講演と学習カードの作成
 □第4時 **未知の状況に遭遇!**

新たな学習問題「旧平岡村は長野県令「天竜川への材木放流許可」を阻止できたか、できなかったか」

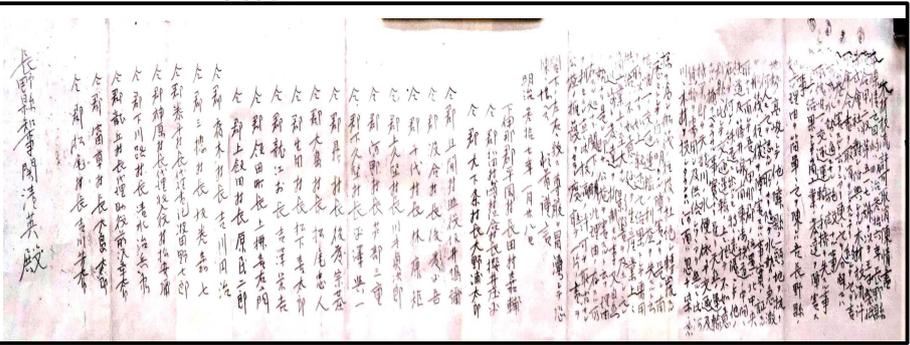
第4時 未知の状況に遭遇

長野県令「天竜川への材木放流許可」が発令

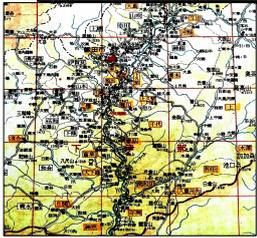
操業から4年経った1903年11月、王子製紙は経費削減のため、満島港で材木を筏に組み直すことをやめ、バラのまま、天竜川を佐久間まで流すことを決定した。長野県令としても「天竜川への材木放流許可」が出された。

「えっ、何で?」「筏師はどうなるの?失業してしまう」「材木はきちんと筏に組みないと痛みが激しくなる」

□第4時の授業後、Cさんは自らの問題意識「阻止できなかった」ことがわかる動画を見つけ、その動画を級友に広めた。
 □第5・6時:新たな学習問題「なぜ、阻止できたか」
 問題解決のための資料 ↓ 天竜川への放流取消を求める陳情書(1町25村)



【右資料からの問題意識】
 「えっ?本文より名前の方が長い」
 「何でこんなに多くの村や町の名前があるの?」
 「村や町はどこ?平岡村とどんな関係?」



【学習問題についてわかったこと】
 Aさん「私たちのご先祖様が川や家族を守るよと必死に訴えたことが誇らしい。当時の人々のように目的のために自分のできることをフルサイズで発揮したい」
 Bさん「立ち向かっていった下伊那の人々の心は強い。王子製紙とはいろいろあったけど、トンネルを造ってくれるなど今の生活ができていのも王子製紙のおかげ」
 Cさん「下伊那の村長さんほとんど全員が陳情書に名前を書いている。それぞれ自分たちの村が大切だから、その気持ちを理解できたから」

【まとめ】「自分のできることをフルサイズで発揮したい」「いろいろあったけどwin-winの関係づくり」等、問題意識を持ちながら、知識を生き方につなげている。さらに、村民を慮る首長の姿を浮き彫りにし、首長の苦悩ぶりに心を寄せている。問題意識を持ち、ふるさとの人々が未知の状況にどう対応したか、自分事として考察すると、自己の生き方につなげられることがわかった。切実な問題意識が持てるよう教科の授業でもキャリア教育の視点を生かしながら生徒の学習意欲を育てていきたい。

